

# 沖縄の清明祭のお供えと、墓の今後

武井基晃\*

## はじめに

本稿は、清明祭を中心とした沖縄のお供え——先祖と子孫の共食——の実態と、墓をめぐる今日の状況から、沖縄の墓参りと墓の今後を考えることを目的とする。お茶の水女子大学比較日本学教育研究部門・第24回国際日本学シンポジウム（2022年9月17日（土）オンライン開催）でのコメントに加筆したものである。

## 1. 墓参りの日付

1年のうち、墓参りに行く日はいつかと言えば、日本では主に春・秋の彼岸とお盆の時期であろう。ところが沖縄県内で墓参りの日と言えば、まず4月の清明節の時期が挙げられる。

こう聞くと、日本本土の人はやはり沖縄の習俗は珍しいと感じるかもしれないが、ここで東アジアに目を向けると、4月5日頃の清明節は、中国・台湾（掃墓節：サオムージエ）でも韓国（寒食：ハンシッ）でも墓参りに出向く日なのである。むしろ、4月5日の清明節の時期に墓参りに行かないどころか、清明節があまり知られず意識もされない日本の方が、東アジア諸国から見れば珍しいと言えるのである。

加えて沖縄県内では旧暦1月16日も十六日祭と称し、墓参りの日である。ただし沖縄県内でも風習に違いがあり、沖縄本島中南部では前の年に亡く

なった人（新仏）がある家が死者を供養する日であるのに対して、宮古・八重山では1月16日の墓参こそが年間でも最も重要な祖先祭祀の日である。

## 2. 旧暦と新暦の日取り

沖縄の行事は、新暦つまり太陽暦（e.g. 清明節、彼岸）と、旧暦つまり月齢にもとづく太陰暦（e.g. 旧正月、旧暦1月16日の十六日祭、旧暦の15日のウマチー、旧盆など）が混在していて、沖縄の生活者にとっていずれの暦も重要である。新暦ベースで見ると旧暦の日付は毎年ずれるため、新・旧の暦の日の換算は行事を執り行う上でその都度不可欠となるし、旧暦と新暦の巡り合わせによってはスケジュールが緊密になる年もある。

そこで、近年で新暦に対し旧暦の始まりつまり旧正月が最もはやい2023年（1月22日）と最もおそい2026年（2月17日）を比較してみると本島中南部ではどの家でも比較的大きな行事である旧正月と神御清明（カミウシーミー）の間は、2023年は77日間あるのに対し、2026年は47日間であり、実に30日も差がある。さらに春の主な行事は次のようになる。2023年は、旧正月（1月22日）・十六日祭（2月6日）・二月ウマチー（3月6日）・春の彼岸（3月21日）・清明（4月5日。この日は水曜日なので最も大きな神御清明の墓参りは9日の日曜日に実施）である。十六日祭、二月ウマチー、清明がちょうど1ヵ月おきにcomingことになる。一方、2026年では、立春（2月4日）のころはまだ前の年の年末（旧暦12月）であって、その後、旧正月（2

\*筑波大学・准教授

月17日)・十六日祭(3月4日)・春の彼岸(3月20日)・二月ウマチー(4月2日)・清明(4月5日。この日は日曜日なので神御清明を実施)となる。二月ウマチーの3日後が神御清明に当たり、供え物などの準備に追われる人もいと予想される〔武井 2021〕。

### 3. 墓参の対象とその見直し

図1は、系譜関係と墓参りの対象を示した模式図である(元祖からA家の間には、元祖直系の大宗家、大宗家から分立した小宗家、小宗家から分立した(A家にとっての)本家などがある)。A家の人は墓参りの時期、特に清明節後の最初の日曜日に、元祖の墓をはじめ系譜の上位の墓を拝む(これを神御清明と称す)。それが済んでから自家の直接の本家の墓なども拝んで回る。

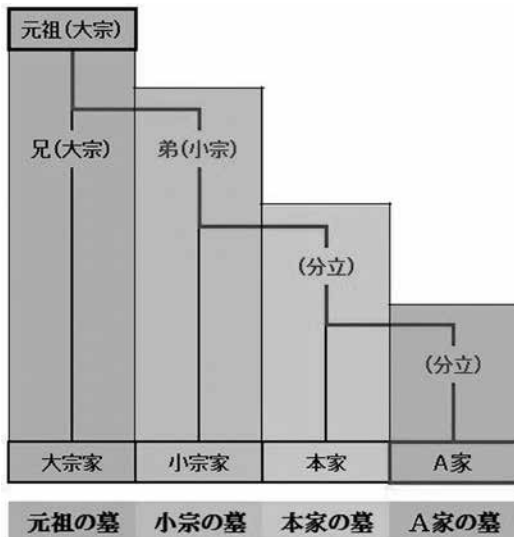


図1 墓参りの対象(模式図)

このように、自家の墓よりも優先して拝むべき墓がある。元祖の墓や本家の墓が近くにない場合は、移動しなければならない。そのため、自動車普及以前には、体力のある青年たちがお供え物を担いで徒歩で、親族や地域を代表して遠く離れた

墓や宗家への祖先祭祀に向かっていた。そこから自動車社会化を経た今日、祖先祭祀は自動車での移動を大前提として成立している。年少者や高齢者のような体力のない世代は自動車のおかげで親戚一同が揃うような行事に参加できる。実は、自動車で行事に参加する今日の高齢者の中には、若い頃に徒歩での墓参を経験し、今なお参加し続けている人がいるのである〔武井 2015〕。

その一方で、世代交代を重ねると若い世代にとっては、元祖の墓など遠い先祖との関係は、歴史の彼方から来る実感のない縁となってしまう〔武井 2018〕。これに重ねて、生活の変化の影響もあり、墓参の対象を見直す動きに門中——父系に傾斜した系譜関係で結ばれた祖先を同じくする集団——は直面しているのである。

### 4. 墓参と食

#### ①重箱の料理

図2・3は、沖縄本島中南部のある門中が清明節の墓参で墓前に供えた重箱の一例である。このように重箱の中に7つあるいは9つの奇数の料理を詰めて墓参に携える。

牛蒡・三枚肉・揚げ豆腐・蒟蒻・昆布・鶏肉の天ぷら、そして赤蒲鉾が納められている。蒲鉾について、葬式の際には白い蒲鉾を用いるのだが、毎年墓参は祖先と子孫が再会する場であるので、お祝いの意味を有する赤い蒲鉾が用いられる。

清明節を過ぎた4月の日曜日、家や門中単位でこうした重箱を準備し、拝むべき祖先の墓をめぐるのである。1日に複数の墓を回る場合は、墓前で祖先に対して重箱の料理を広げ、ウチカピ(打ち紙=紙銭。あの世のお金)を燃やして墓を拝みはするが、最初のほうに回る墓の前では重箱は広げるのみで、参加者たちは食べない。いくつか回って昼過ぎ頃、その日の最後となる墓の前で、いよいよ重箱を開き、その中の料理を皿に取って(図4)、祖先と子孫の年に1度の会食の場が持たれ



図2 墓前に供える重箱の例

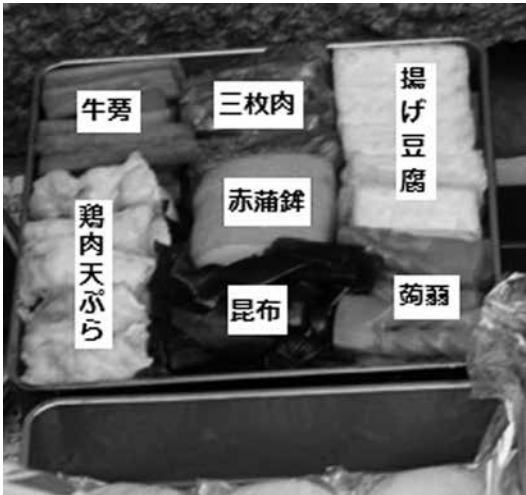


図3 図2の料理

るのである。親戚や姻戚など墓参の対象が多い人は、4月の間は日曜日ごとに墓前食をくり返すことになる。

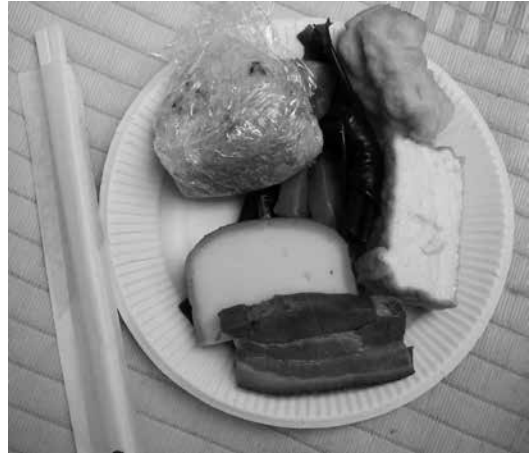


図4 重箱から料理を取り分けた皿

## ②御三味（ウサンミ）

つづいて、同じ沖縄本島でも、上記の重箱の料理とは異なるお供え料理の事例を2019年4月の調査をもとに紹介する〔武井 2023〕。

琉球王国時代、久米村（現・那覇市久米）に居住した一族が祖先に供える料理で、豚肉・鶏肉・魚肉からなり、御三味（ウサンミ）と称する。首里・那覇のものとは異なる歴史的な文脈を継承した食文化であり、中国の「三牲」を由来とするとされる。

前日から買い出しや下ごしらえが行われ、当日早朝から、蒸した魚をほぐすなどの調理が行われた（図5）。御三味の中身は、水煮した豚肉・蒸し煮した鶏肉・魚肉、ゆで卵ときゅうりで、タレは鰹節・酢・醤油・みりん等だが、各家庭により味にこだわりがある。この調査時では、魚はシチューマチ（アオダイ）が20尾（25kg）、豚肉の三枚肉（20kg）、鶏肉（12kg）、きゅうりそして卵（120個）が調理された。



図5 蒸した魚をほぐす



図7 御三味の折詰め



図6 御三味と玉子・きゅうりを重箱に詰める



図8 墓前に供えられた御三味の重箱

完成した御三味の重箱（図6）はまず元祖の位牌に供えられた。そしてこのほかに、参加者が墓前で食べるための、1人前サイズの折詰めが100人前用意され、手分けして詰められた（図7）。その作業は10人弱によって8時半から10時頃までかかった。

ジュシー（炊き込みご飯）のおにぎりの重箱、餅の重箱も用意され、果物や菓子とともに墓前に供えられた（図8）。墓前の準備は12時頃には整い、墓前での清明祭は13時に開始され、墓への拝礼のあと、祖先と子孫の会食が行われた。

## 5. 墓地の購入

ここで改めて、沖縄の墓を伝統的な利用と所有から分類すると、次の通りである。①村墓（ムラバカ。村落の住民での共用）、②模合墓（ムエーバカ。複数の家での共用）、③門中墓（ムンチュウバカ。父系の親族集団での共用）、④家墓（イエバカ。一家ごとの墓）。このうち①～③は複数の家による共同利用で、特に門中墓は沖縄本島の南部における、墓の大きさもこれに関わる人の範囲も大規模なものが有名である。ただし、有名ではあるが限られた事例であることに注意されたい。

共用の墓のみならず、家ごとの墓もまた大規模

なものがあり、時には既存の墓も売買の対象となる。



図9 電柱に貼られた「売墓地」の広告

かつては「風水」として知られるように、立地の良いとされる墓所が高い価値を有した。また、集落から離れた斜面から村落を見下ろす眺めの良い墓所も評価が高かった。墓所に用いる大量で大きな石材を運ぶ人件費・建築費もかかることから、財産のある家しかそういった場所に墓を建てられなかったという理由もある。

ところが今日、図9にあるように、道路沿いであって「車両横付可」である墓地が好まれるようになった。足腰の弱い年輩者でも墓参りに行きやすかったり、重箱などのお供え物を運びやすかったりするからである。そのため、集落に近い安い墓所しか買えなかったが、年を経て価値観も変わり、目の前に広い道も開通して通いやすくなり、かえってこっちのほうが良かったという笑い話も語られるほどである。

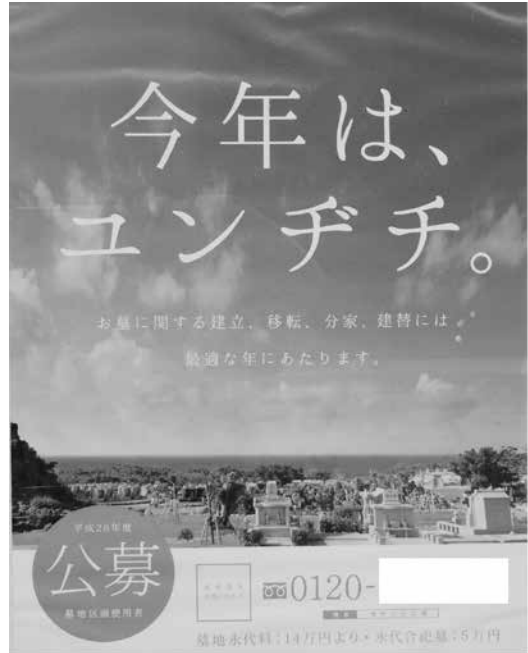


図10 ユンヂチを謳った墓地の広告

沖縄では墓地を購入するのに適するとされる時機がある。それは、ユンヂチと呼ばれる1ヶ月で、旧暦の暦と季節の調節のために加えられる、閏月のことである。この1ヶ月の間は年中行事が行われないこともあって、お墓を建てるのに適する月とされ、ユンヂチがある年にはお墓の売買が積極的に展開される（図10）。

近年、沖縄県内でも各地で分譲墓地の販売が進んでいる。墓前での会食のために座る場所を広く設けた分譲墓もある（図11・12）。但し、日差しも強く、石も熱くなることから、あまり長居はしないとのことである。

分譲墓地の購入について調査するためには、購入者の家の墓がもともとどのような墓制だったかに着目することが必須である〔武井 2021〕。たとえば、門中墓など伝統的な共用墓に入るはずだった家・個人が分譲墓地を購入するならば、それは共用墓からの離脱のためである。この場合、もともと家墓の墓制——イエを分立したら墓も分ける——の人が自分の家の墓の購入を図るのは大き

く異なるわけである。



図11 分譲墓地



図12 墓前が広く取られた分譲墓地

## 6. 沖縄の墓の今後：「墓じまい」の可能性

沖縄本島南部の、ある門中墓に所属する男性は、すでに母親を門中墓に入れ、そのあとに課される役目——その墓に次の納骨があるまで務める墓の「門番」——も果たした。その人は既に生活拠点は内地なのだが、父（90歳代）を門中墓に入れるためにもこの役割を果たしたのである。また自身もその門中墓に入りたいと考えている。言わば、死後の帰郷である。自身が門中墓への納骨を希望する理由は、自分の家の墓を持たずに済むからである。このことは、次の代に墓を残さずに済むこ

とと同義となる。こうした文脈で、門中墓のありがたさが今日評価されている。

少子化が進む昨今、1軒ごとに墓を持たないで済むという意味で、門中墓が改めて家墓の墓制の人からうらやましがられることもある。たとえば、門中墓の話聞いて、自分の門中の門中墓を頼ろうとした人がいたが、その人が属する門中が所有する門中墓は過去の大宗家の人のみが納められた墓であった。今日はただ門中の祭祀で拝むための墓であり、もともと門中成員であっても納骨を受け容れていなかった。そのため、この人はたいへんガッカリしたとのことである。

こうした声や墓をめぐる現況を受けて、沖縄県内の寺院では近年積極的に、永代供養などのサービスを展開している。もともと檀家制度がなく、人々と寺院が直接結びついてこなかった沖縄県では、分譲墓地も永代供養も、各宗派の寺院が沖縄県内で展開し信者を獲得するための戦略の1つである。

今日、沖縄県の人々の間でも、このような寺院のサービスを今後のための選択肢にできることが前向きに知られてきている。その結果として、代々の墓を「墓じまい」する可能性も受け容れられつつある。

引き続き、調査を続けなければならない。

### 引用文献

- 武井基晃 2015 「自動車社会化と沖縄の祖先祭祀」 関沢まゆみ・国立歴史民俗博物館編『盆行事と葬送墓制』吉川弘文館
- 同 2018 「史縁の継続性・週及性—沖縄の祖先祭祀における現在の判断の積み重ねを事例に一」 古家信平編『現代民俗学のフィールド』吉川弘文館
- 同 2021 「南西諸島の年中行事 研究動向と着眼点」 新谷尚紀編『講座日本民俗学 3 行事と祭礼』朝倉書店
- 同 2023 「沖縄の墓前食—首里の玉陵・那覇の久米村系の清明祭および石垣島の十六日祭の新型コロナ禍直前の調査—」『国立歴史民俗博物館研究報告』241